

## コラム

# 日本滅亡の危機から 70 年、将来に禍根を残さないインフラづくりを！

ジャーナリスト（NPO 法人社会基盤の超長寿命化を考える日本会議 副理事長）  
齋藤宏保

戦後 70 年の今年、日本の立ち位置が改めて注目されているが、そもそも終戦時はどのような状況だったのか。それを知る一つが、終戦時の首相鈴木貴太郎の談話をまとめた「終戦の表情」（労働文化社）。終戦 1 年後の昭和 21 年 8 月に発行されたが、鈴木貴太郎によると最後の最後まで軍部が 1 億玉砕を主張、日本は滅亡の危機に立たされていたという。

それにしてもなぜ、日本の滅亡の危機に追い込むような戦争を始めたのか。鈴木貴太郎は「日清、日露の両戦役以来、日本人は大陸政策といふものを唱へ、血に依って購った特殊利益とか、大陸には一切の資源があるやうな妄想にとりつかれて了った。（中略）その大陸を手に入れるためには一切の没道義なことを平然として行ひ、大陸さへ手に入れれば世界を相手にして戦争出来るやうな誇大妄想的な考へ方に轉落して行つた。さういふ空気が（中略）、滿洲事變勃發頃には頂點に達し、この氣持は更に擴大して隣邦支那を侮視し、東洋の盟主といふことを自ら唱へるやうになつた。」と、大陸に資源を確保するのが目的だったと述べている。



4 月 29 日、安倍晋三首相は米国議会で「戦後の日本は、先の大戦に対する痛切な反省を胸に、歩みを刻みました。自らの行いが、アジア諸国民に苦しみを与えた事実から目をそむけてはならない」と演説したが、「侵略」や「おわび」の言葉がなかったとして、隣国の韓国や中国から反発を招いている。戦後 70 年といっても、戦争の傷は簡単には癒えない。未来志向ということで、過去に“蓋”をすることは、侵略者側の論理といわれればそれまでである。

6 月 26 日に、英国のエリザベス女王が「アンネの日記」で有名なアンネ・フランクが最後の日々を過ごしたドイツの強制収容所跡地を訪問する。これも戦争の悲惨さを忘れてはならないという思いの表れだろう。鈴木貴太郎が日本の復活のあり方として「先方の氣持になって実行する」と述べているが、過去を直視し被害を受けた国々の氣持ちになって行動することが大切である。

また戦後 70 年の節目の今年だからこそ、どのようにして戦争が始まり、戦災の廃墟から立ち直ってきたのかをきちんと理解し、先人の思いを将来に引き継がなければならない。

それはインフラの世界でも同じ。例えば今、国策として売り込む新幹線。日本政府はモータリゼーションの時代に逆行するとして建設に乗り気ではなかった。世界銀行の融資は貨物も運ぶことが条件だった。経費を浮かすために、スレンダーな細い橋脚、客車ごとにモーターを付ける分散荷重方式が採られた。ルートは、用地買収がしやすい、人家が少ない地形・地盤が良くないところが優先的に選ばれた。こうして建設されたのが東海道新幹線である。

新幹線と同様、東京オリンピックの目玉として開通が急がれた首都高速道路も同じような状況だった。当時日本には高架道路を建設する技術がなく、西ドイツに派遣した技術者からの連絡で、毎日のように設計変更を繰り返し、材料も職人も不足する中、突貫工事が行われた。正に、インフラ整備は質よりも量を優先の時代だった。

これから日本は急激な人口減少の時代に入り、経済的、人的に余裕がない。だからこそ、現在あるインフラがどういう目的でどう作られどの程度老朽化が進んでいるのかを把握し、どういうインフラでどう少子社会を支えたらよいか、構想し直すことが必要である。しかし現実はどうか。震災復興と東京オリンピックという旗印の元に、新たなインフラを作ることばかりに狂奔する姿に強い違和感を覚える。

将来にわたって本当に必要なインフラをしっかりと作って守り次世代に引き継ぐ、私たちが NPO を立ち上げたのは、こうした思いと将来への危機感からである。